

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04172

研究課題名(和文)音楽流通の場としての近代の劇場に関する社会学的研究

研究課題名(英文)A sociological study of modern theatre and music dissemination

研究代表者

宮本 直美 (Miyamoto, Naomi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40401161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は19世紀のヨーロッパにおける音楽の普及について、劇場という場とそこでの演奏、そして物理的媒体としての出版楽譜の関係を軸に考察するものである。劇場という場はクラシック音楽/ポピュラー音楽というカテゴリー形成において無視できない役割を果たしていた。従来の研究では注目されてこなかったこの場の研究が明らかにするのは、安定的な「作品」概念とその鑑賞という認識が成り立たないほど雑多で入り組んだ音楽の流通現象である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽研究において近代の出版楽譜と劇場との関係が注目されることはほとんどなかった。出版楽譜研究は大作曲家の作品と関わる限りにおいて重視されてきたのだが、音楽普及や享受の実態を見る上では無名の作曲家の出版と劇場の関係へのアプローチは不可欠である。芸術としての音楽・商品としての音楽のあり方は現代の音楽産業構造にも影響を及ぼすものであり、本研究は現在の音楽と劇場との関係についても示唆を与える。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to clarify the close relationship between theatre and music publishing within the context of musical popularity in nineteenth-century Europe. During this period, Europeans enjoyed various types of songs, from artistic and operatic to simple and popular songs. Moreover, some popular operatic songs were arranged and published in different ways. By producing and distributing music, theatres and music publishers contributed to sharing musical tastes across European cities. As opposed to the previous discussion of music reception, stable composer-performer-audience relationships were not possible during the music dissemination process.

研究分野：文化社会学

キーワード：音楽社会学 劇場 楽譜出版

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまでの研究において、「芸術音楽」と「ポピュラー音楽」といった音楽の社会的価値の形成過程を対象としてきたが、近代ヨーロッパの音楽事情に関する研究を進めるうちに、実態はそうしたカテゴリーに明確に分類できるものではなく、演奏の場所、演奏者、演奏楽曲の種類などが様々に混在していたことが分かってきた。従来の知見としては、芸術音楽の歴史とポピュラー音楽の歴史として別々に捉えられてきたものを、合わせて考える必要性を主張するのが本研究の立場である。

その「混在する場」として、そしてクラシックとポピュラーが分化してゆく源として、本研究が注目したのは、出版楽譜と劇場の関係である。

音楽研究において、近代の出版楽譜事情と劇場との関係が注目されることはほとんどなかった。というのも、出版楽譜研究は専らクラシック音楽を対象とした音楽学によって担われ、それはすなわち大作曲家の作品の出版に関わる範囲で行われてきたためである。そしてその出版楽譜研究が劇場と結びつけられることはなかった。しかしながら、音楽の流通を考えるうえで、この2つの項は実は密接に結びついている。それは音楽の社会的カテゴリー以前に、音楽の商業性や産業構造に規定されているのである。

芸術とされる音楽を生み出すのも、流行曲を生み出すのも、鍵となる「場」は劇場である。それは新興の中産階級が、また古い貴族階級が、そして労働者階級が、都市生活を享受する中心的な場であった。19世紀の都市生活と音楽活動の関係を論じた重要な先行研究は D.Scott の業績 (Sounds of Metropolis.2008) であり、彼は都市における音楽生活について、様々なタイプの音楽が混在する実態を明らかにしているものの、劇場という場を特に重視しているわけではない。

他方、出版楽譜に関しては、大作曲家に関わるもの以外では、ほとんどその実態が分かっていない。そうした出版業者はヨーロッパ中に支店を持つ大手であることが多いが、人々に広く流通していたポピュラーソングは小規模な業者によって出版されていた。しかもその楽譜の種類は様々で、そこには楽譜印刷技術やそのコストが関わっていた。音楽出版に関しては、従来は楽譜印刷技術にばかり注目が集まっていたが、本研究はその産業的・社会的側面を捉えるものである。

### 2. 研究の目的

本研究は19世紀のヨーロッパにおける音楽の普及について、劇場という場とそこでの演奏、そして物理的媒体としての出版楽譜の関係を軸に考察するものである。「劇場」自体は近代ヨーロッパの都市生活において、単に舞台芸術を提供する場として機能していたのではなく、公共の社交生活空間として、音楽ジャンル形成および普及に寄与し、諸階級の余暇活動、流行発信などの面でも重要な役割を果たしていた。劇場という場はクラシック音楽/ポピュラー音楽というカテゴリー形成において無視できない役割を果たしていた。本研究の第一の目的は西洋近代の都市における劇場という視角から音楽活動を考察することであるが、それは同時に音楽学・美学・歴史学・演劇学を横断する形での新たな文化社会学の試みである。

劇場と言っても、高尚なオペラハウスもあれば、タヴァーンやサルーン、ホールと呼ばれた音楽演奏を伴う居酒屋や飲食を伴う音楽会場も含まれる。従来の音楽史研究では、「作品」として美学的に確立されたものが創作され、演奏され、鑑賞されたという見方によって音楽現象が語られてきたが、本研究が明らかにするのは、そうした「作品」概念が成り立たないほど雑多で入り組んだ音楽の流通現象である。とりわけ、オペラというジャンルは高尚な芸術音楽と目されることになるものの、19世紀においては断片化され、ポピュラーソングとなって幅広い層に行き渡っていた。ポピュラー音楽と芸術領域とは明瞭に区分けできるものではなかったことを明らかにすることも、本研究の目的である。それは「創作 - 演奏 - 受容」という創作物を中心に据えた文化研究ではなく、近代化する社会の中で生じた様々な価値体系・意味付与の営為の中に音楽活動を位置づけるということである。

### 3. 研究の方法

(1) 大作曲家に関わった楽譜出版社や、正式なオペラ劇場については従来の研究でも詳細な情報を得ることができる。しかしながら本研究が対象とするのは、そうした輪郭の明瞭な対象ではなく、存在していたことは知られているものの、その実態がよく分からない楽譜や劇場である。

そのために、本研究では様々な一次二次資料から断片的な情報を収集することによって全体像を構築することとした。具体的には、当時の音楽雑誌や新聞などの広告欄を調査すること、当時のヒット曲として知られている楽曲の出版情報から出版社を辿ることに加え、いくつかの大手出版業者や劇場関係者についての調査を行なった。

(2) また理論的な考察のために、現代にまで及ぶ劇場とポピュラー音楽との関係について、隣接分野の研究者との意見交換を行い、この問題の展開可能性を検討した。

### 4. 研究成果

(1) オペラのポピュラーソング化

19世紀のロンドンの楽譜出版状況を概観して明らかになったことは、ノヴェットなどの有名な出版社の他に小規模で短命な出版業者が数多く存在していたということである。そして規模の大小に拘らず、オペラの有名ナンバーは彼らにとってポピュラーソングとして重要なレパートリーとなっていた。当時のヨーロッパで人気のあったロッシーニやオベール、ベリーニらのオペラのアリアが多数の出版社から売り出されていた。注目すべきは、それらは必ずしも、オリジナルのオペラの一部として出版されていたのではなく、むしろ多くの場合全く異なる歌詞とタイトルで公刊されていたことである。そのバージョンも人気曲であればそれだけ多い。ここから分かるのは、オペラから独立して人気曲となったアリアなどの楽曲が、特にその旋律が人気となり、庶民に親しみやすい歌として改変された状態で流通していたということである。また、原曲の改変曲をさらに改変して別タイトル、別の歌詞で売り出されるという場合もあった。メロディーを流用したまま、幾度も替え歌のような楽曲が生み出されていたということが分かる。19世紀前半にはオペラの作曲家の著作権も徐々に確立していった時期ではあるが、裾野となる現場ではこのような形で流用が行われ、親しまれていた。

音楽史、オペラ史においても、こうした楽曲の出版と受容についてはほとんど知られていない。音楽史(作曲技法史)的には意味のない現象ではあっても、オペラというブルジョワ向けの音楽ジャンルがこのような形で社会に根付いていた現象はもっと注目されるべきであろう。

## (2) 19世紀ロンドンの音楽出版業者と出版楽曲

本研究では、先行研究を含めた様々な材料から、19世紀のロンドンにおいて少なくとも1663の音楽出版業者が存在していたことを確かめた。各業者の出版カタログのようなまとまった資料はないものの、各社の主なレパートリーを確認したところ、当時の人気ジャンルの傾向が判明した。

人気ジャンルとして挙げられるのは、ショーなどで歌われるポピュラー歌曲、ダンス音楽、宗教音楽を中心とした合唱曲、各楽器の教則本である。

ポピュラー歌曲の中には、「ミュージカル・コメディ」「コミック・ソング」「ミュージックホール・ソング」といった分類語が多く見られただけではなく、 minstrel・ショーの人気曲を集めた歌曲集なども出版された(これらは歌詞のみの曲集)。こうした傾向からも、タヴァーンやサルーン、ホールといった娯楽用劇場の歌が出版されていたことが窺える。また、19世紀のポピュラー音楽として重要なジャンルはダンス音楽である。ヨーロッパ中で、ワルツ、ポルカ、ギャロップ、カドリユといったダンス音楽が人気だったのは、オペラハウスなどの劇場で舞踏会が開かれ、若い男女を引き付けていたからである。当時、大人気を誇っていた指揮者も自身の楽曲を出版している。他方、娯楽というよりは真面目な音楽への取り組みを象徴するのは宗教的な合唱曲の楽譜出版である。この分野は従来の研究でも知られていることではあるが、しかしながら、そうした宗教曲を出版する業者が同時にダンス音楽やポピュラーソングなどの大衆的娯楽音楽をも出版していたことは併せて理解する必要がある。宗教曲が人気だったのは、当時のロンドン、そしてヨーロッパ中で、アマチュア合唱団が広く展開していたためである。19世紀には合唱人口が増え、そのための楽譜は需要が高かった。その中にはヘンデルやハイドンのオラトリオの楽譜も多く含まれ、各地で演奏される人気曲であったオラトリオが楽譜となって各家庭、親密なサークル内に回っていたことが分かる。そして、各種教則本は、ピアノは当然として、その他の楽器向けに特化したものが出版されていた。これらの傾向を概観した上で、本研究において重要なのは、劇場との結びつきを示すポピュラーソングとダンス音楽である。

当時は楽譜印刷技術が進歩し、19世紀半ばには楽譜の値段は更に下がり、より多くの楽譜が出版されることとなった。その中には「チープ・ミュージック」と銘打つものも少なくなく、すでに出版されていた楽曲の廉価版が人気を博していたということも分かる。また、短命の出版社が多かったこともあり、その著作権が売買されて別の業者に引き継がれ、あるいはオークションによって著作権を得て再販される楽譜も多かった。

## (3) タヴァーンやホールの歌手の実態

小規模な出版業者によって、劇場の歌がポピュラーソングとして出版されていたわけだが、本研究では、出版社の調査とは別に、劇場で歌っていた歌手の手記を調査した。そこから、歌手たちが具体的にどのような活動をしていたのかが窺える。

娯楽性の高いタヴァーン、サルーン、ホールといった場所で歌っていたのは、多くの場合アマチュアであった。その中にはたとえば大英博物館の職員もおり、日中の仕事を終えた後、夜に劇場を訪れて歌っていたこと、さらには同じ日に「ハシゴ」をして別の劇場で歌っていた歌手もいた。それは歌で生計を立てるプロの歌手の姿ではない。歌うために劇場に行き、あるいはそこで聴衆の一員ともなっていた。またそうしたケースで注目になるのは、彼ら自身が自作の歌を披露していたということである。そして出版業者調査においても、自身の楽曲を出版している業者が少なくなかったことも興味深い。つまり当時の劇場歌手は、アマチュアでありながら、作曲し、演奏し、出版までしていたということである。それはポピュラー音楽研究では20世紀後半に指摘される「シンガ・ソング・ライター」と同じ音楽現象であったとも言える。その中から特に人気となった歌曲が生き残ったのである。このようなアマチュアの自己表現の場としての劇場のあり方は、すでに高尚な劇場となっていたオペラハウスのあり方とは全く異なるものであった。クラシック音楽の領域では合唱以外はプロフェッショナルで占められていくのに対し、ポピュ

ラーの領域では、一部のプロと多数のアマチュアが入り混じって活躍していたわけである。

#### (4) 劇音楽とポピュラー音楽

本研究では、19世紀の雑多な音楽流通現象を主たる対象としつつ、劇場とポピュラー音楽の関係は現在にまで続いていることを鑑み、この問題をより広い視野から捉えるべく、隣接分野の研究者とのワークショップを開催した。具体的には、20世紀初頭の劇音楽界を対象として、クルト・ヴァイルの専門家である大田美佐子氏、映画音楽の専門家である白井史人氏と共に、意見交換を行った。ヴァイルの事例からは、ベルリンにおける芸術志向とニューヨークにおける大衆志向性との作曲家内の調停の方法が明らかになった。ヴァイルに限らず、多くの作曲は現代でも、芸術性の高い作曲と大衆に受ける楽曲創作とを同時に行なっている。また映画音楽の検討からは、ある映画作品で有名になった音楽が、映画の文脈から離れて独立に流通し、さらに別の映画に背景的な音楽として用いられるという事例が検討される。こうした音楽の流用は、19世紀のオペラの受容と通じるものであり、あるいはもっと遡ればグレゴリオ聖歌などが様々な楽曲の中で元々の意味を伴いながら流用されてきたことにも類似性を見出せる。

いずれも音楽の断片化と脱文脈化という枠組みで捉えられる現象であり、音楽は作品として確たる「形」で受容されてきたのではなく柔軟に変形しながら流通し、その都度意味を変えてきたことが示唆される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宮本直美	4. 巻 655
2. 論文標題 ミュージカルによる戯曲の解釈と表現 - 『老貴婦人の訪問 Der Besuch der alten Dame』における音楽構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 22-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本直美	4. 巻 663
2. 論文標題 「共に歌うこと」と集合的感情 - - A.シュッツの音楽社会学再検討 - -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 138-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Naomi Miyamoto
2. 発表標題 Involvement in Chorus: Collective Feeling and Alfred Schutz's Theory (Oral Presentation)
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology, Toronto, Canada (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naomi Miyamoto
2. 発表標題 Gendered Body on Stage: The Takarazuka Revue Company and Japanese Subculture (Oral Presentation)
3. 学会等名 New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations, University of South Australia, Adelaide, Australia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本直美
2. 発表標題 劇場から音楽シーンへ / 音楽シーンから劇場へ
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第29回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naomi Miyamoto
2. 発表標題 Singing Together: Choruses and Alfred Schutz's theory of musical communication
3. 学会等名 13th Conference of the European Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本直美
2. 発表標題 ミュージカルにおける戯曲の解釈と表現 - 『老貴婦人の訪問 Der Besuch der alten Dame』における音楽構造
3. 学会等名 日本演劇学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naomi Miyamoto
2. 発表標題 Constructing Collective Memory through Choral Singing in Fukushima
3. 学会等名 14th Conference of the European Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----